

令和6年度 堅田小学校学校評価書

(実施時期：：自己評価…令和6年11月

学校関係者評価…令和7年2月)

項目		評価の観点	職員		評価		項目に関する分析・意見・提言 など ・職員 ◇学校関係者（PTA・地域等）	今後の改善に向けて
			肯定的評価	小項目評定	自己 (職員)	学校 関係者		
堅田小 スタン ダード	授業づくり	基本的な学習の流れ（「めあて」「まとめ／ふり返り」等）、「学習の約束」、基礎学習タイム、朝読書タイム、を意識した指導に努めている。	97.3%	A	A	A	【授業づくり】 ・基本的な学習の流れ（「めあて」「まとめ／ふりかえり」等）については、どの学級においても意識をして取り組むことができている。 ・めあてはどの学級もホワイトボードに提示されているが、まとめやふりかえりの行い方については、工夫が必要である。 ・基礎学習タイムに国語の文法表現や作文の練習に取り組んだことで、基本的な書く力の向上につながった。 ・基礎学習タイムは新出漢字だけでなく、算数の復習などにも取り組むことができるようになってきた。 ・本を読むことを苦手とする児童が多い。朝の読書タイムの充実を図るために、教師がどのように働きかけていくか見直す必要がある。 ・計画的に図書室を利用したり、読むことの大切さを伝えたりする必要がある。	【授業づくり】 ○基礎学習タイムの内容を精選する。 ・新出漢字の学習が主な学習活動になっているが、算数の復習を行うなど有効な活用を検討する。 ・国語科の小単元を分割したり、書く力向上に繋がるミニ学習を取り入れたりする。 ○朝読書タイムの充実を図る。 ・担任が継続して働きかけることにより、意欲的に読める子や読書が好きになった子もいる。今後も子どもたちが本に親しむことができるよう、働きかける。 ・教員による読み聞かせ入れたり、音読をしたりするなど活動内容も工夫していく。 ・学級文庫も充実させる方法を検討する。 ・保護者・地域のボランティアや図書館との連携がありがたい。今後も連携を推進していく。
	生徒指導	3つの約束「あいさつ」「そうじ」「聴く」の指導の徹底、問題行動・いじめ・不登校・虐待等についての迅速な組織対応（学年、担当、関係機関）に努めている。	94.7%	B			【生徒指導】 ・3つの約束「あいさつ」「そうじ」「聴く」を意識して取り組んでいる担任が増えた。 ・数年前から毎月の生活目標に3つの約束を計画的に取り入れ、重点的に取り組んでいる。取り組んでいる期間については、職員も子どもたちも高い意識をもつことができ、成果が表れている。日常の学校生活においても、子どもたちが意識できるよう、取り組みを充実させていきたい。 ・生徒指導部会で今年度は廊下歩行に重点をおいて取り組んだことで、児童自身からも廊下歩行を呼びかける姿があった。 ・担当者や部会からはきめ細かく、積極的な声かけがあった一方で、学級や学年により取り組みにばらつきも見られた。 ・「そうじ」については掃除場所も広範囲にわたるため、課題も見られた。 ・学校生活のやくそくやマナーについては、子ども・保護者・地域・教職員から多様な意見が寄せられており、それらを踏まえて検討していく必要がある。 ・組織対応については、本校の体制が数年間定着しており、多くのケースで早期対応が実施できている。対応に時間を要する件もあるが、ケースによっては専門家や関係機関の助言も踏まえ、組織的なアセスメントを元に対応を検討することができている。組織対応は本校の強みと言える。 ◇教職員が一体となった生徒指導体制をとることができている。今後も授業づくりを大切にしながら組織体制を充実させてほしい。 ◇特定の児童だけでなく、全校児童にきめ細やかな支援が行き届くように、さらに取り組みを推進してほしい。 ◇ボランティア等により、教職員の負担も分散されるとよい。 ◇「あいさつ」については、今年度は、学校から離れたところでもスクールガード等に気持ちのよいあいさつをする児童が見られる。	【生徒指導】 ・社会が多様化していく中で、本校の子どもたちを取り巻く環境の変化も激しい。学校のルールやマナーについては、子ども・保護者・地域・教職員の思いを踏まえ、今後も定期的に見直しを行っていく。子どもたちにＴＰＯに合わせた指導・支援を行うことができるようにしていく。 ・教職員が互いに連携し、関係機関や専門家の助言を踏まえた対応を行うことで、指導・支援を充実させていく。 ・その中で、学校生活の中心は授業であることから、生徒指導の視点を踏まえた授業改善に取り組んでいく。
主体的・対話的で深い学び		互いに認め合う支持的風土を育てる学級・学年集団づくりに努めている。	86.8%	B	B	B	・これまで、生徒指導の諸課題の対応に時間を要することが多かったが、今年度は授業改善にかかる時間が増えてきた。授業を通して、多くの児童が充実感を味わえるように、今後も推進していきたい。 ・教職員が各学年の研究授業を互いに参観することで、主体的・対話的で深い学びの充実につなげることができた。 ・ペア学習やグループ学習を計画的に取り入れることで学習活動の充実を図った。 ・ペア学習、グループ学習を取り入れる時間が多くなる中で、話し合う力をつけることが大切だと感じた。 ・ICTは必要な場面をしぼって活用するように心がけることで、使い方を工夫することができた。 ・互いに認め合う学級づくりに向かうために、言葉づかいなど話す力を高める学習が必要に感じる。 ◇ICT活用が進められていてよい。 ◇今後も「書く力」を高めるための授業改善を通して、主体的・対話的で深い学びの充実に努めてほしい。 ◇下校後にゲーム等をする時間が増えているように感じる。放課後の過ごし方が改善できるとよい。家庭学習についてもICTが活用できるとよいと思う。	・今後もペア学習やグループ学習を通して、互いに認め合う支持的風土やあたたかい雰囲気のある学習集団を育てていく。 ・自分の思いをもって学習に参加できるように、個人で考える時間を設ける。 ・「書く力」を高めるための研究を通して、自分の思いを書ける児童が増えてきているので、継続していく。 ・正しい言葉遣いができる児童の育成も研究に取り入れていく。 ・委員会活動、クラブ活動、係活動、学級会、学年集会などを通して、子どもの主体性を高め、達成感が得られるよう工夫していく。 ・学級会の充実を図るために、実践を交流する。
		子どものコミュニケーション能力を高め、共に学び合う授業を意識した授業の工夫・改善に努めている。（ICT活用含む）	92.1%	B				
		「めあて」「ふり返り」や学び合いを取り入れた授業づくり、ペアやグループ学習、自分の考えを持つ活動などを取り入れた、主体的・対話的で深い学びを追究する授業研究や研修に取り組んでいる。	89.4%	B				
学ぶ力の向上と個性を伸ばす教育の推進	道徳教育の充実	生命の大切にする心やいじめを許さない態度などの道徳的実践力を育むよう、「特別な教科 道徳」を中心に、全教育活動で行っている。	86.8%	B	B	B	・道徳の学びは、子どもたちの日常生活を直ちに変容させるものではないが、計画的に充実させることにより、子どもの心に響く取り組みを行うことができているように思う。 ・日頃から道徳的実践力をはぐくめるよう機会を設け、いろいろな考え方に触れられるようにしている。 ・参観日等を活用し、道徳科の授業を公開することができた。 ・人権週間等を上手く活用し、子どもも教師も意識を高めて取り組むことができた。 ・子どもの実態や様子に応じて学習計画を見直し、授業を実施することができた。 ・授業・評価に関する研究は深めていく必要がある。 ・子どもたちが本音を言うことができている。教師の発問の工夫が必要だと感じる。 ◇心優しい児童が多い。道徳教育が充実するよう今後も取り組みを推進してほしい。 ◇外部講師を招いた授業などで保護者参観や祖父母参観を推進し、大人も共に学べる機会が増えるるとよい。	・校舎の長寿命化等改良工事の機会を活用し、教材セットを扱いやすい場所に設置する等、各学年の教材をより充実したものにする。 ・道徳科の授業参観の実施は継続する。 ・各学年で互いの実践を積極的に交流し、発問や板書の在り方等を工夫することで、授業を改善していく。 ・ICTの活用も含めた教材、評価に関する研究を学年ごとにを行う。
		「特別な教科 道徳」の教材、評価に関する研究を行い、資料の整備・交流に努めている。	73.7%	C				
		道徳科の時間を公開するなど、保護者や地域との連携も視野に入れて道徳教育に取り組んでいる。	86.8%	B				
	体力づくり	たくましい心と体を育てる魅力ある授業や体育行事の工夫や改善に努めている。	94.7%	B	B	B	・長寿命化等改良工事がある中で、活動場所が制限されていることは残念だが、その中で工夫して体育行事やカタリンピックの活動に取り組むことができた。子どもたちの豊かなスポーツライフに結び付くよう、取り組みを充実させていきたい。 ・計画的なカタリンピックの開催によって、子どもたちが休み時間に運動に意欲的に取り組むことができた。体力向上に繋がった。 ・体育の授業の年間計画とカタリンピックを連動させることで、相乗効果が生まれた。 ・体育委員会の活動の一つとして、子どもたちがカタリンピックの企画運営や、体育の宿題の動画作成の一部を担った。昨年度まで教師主体で行ってきたものが、子ども主体の活動に切り替えられている。 ・体育の授業をはじめとして、子どもたちの運動量の確保が課題である。 ・体育の教材・教具を充実させたい。 ・体育の宿題については、子ども・保護者・教職員の意見も踏まえ改善を図る必要がある。 ◇安全面から、放課後や休日に子どもだけで運動することが難しい。 ◇地域団体やPTAが連携して、子どもたちが様々なスポーツに挑戦し、運動に親しむ機会が設けられるとよい。 ◇学校の授業でやってみて楽しかった運動は、家でも行う姿が見られる。 ◇体育館に冷房が設置されるなど、施設が改善されるとよい。	・①日々の授業や体育行事（スポーツフェスティバル）、②カタリンピック（大津市のスポーツランキングに合わせて実施）、③体育の宿題を軸として、体力づくりに取り組むことができた。体力向上と運動習慣の充実のために、次年度以降も継続して取り組んでいく。内容については精査し、取り組みの意義を発信する。 ・体育の宿題については、体育授業の準備運動に取り入れたり、委員会の児童が呼びかけをしたり、教室へ教えに行ったりするなどの活動を計画している。 ・カタリンピックを実施すると、休み時間に運動遊びをする子どもが増える。運動に苦手意識を持つ子どもも楽しく参加できるよう、内容を改善していく。
		カタリンピック、学期ごとの「握」「回」「跳」に関わる大会、体育の宿題、学習カードの活用など、運動に親しむ環境づくりや体力づくりを推進する運動実践に努めている。	81.6%	B				
		児童の健康に対する保持・増進の意識や、運動しようとする意欲の育成に努めている。	81.6%	B				

	指導改善（組織的・計画的）	教員間で授業交流や教材研究等に積極的に取り組むなど、学ぶ力向上を目指した指導体制・指導方法の工夫改善に努めている。	92.1%	B			・教育力、指導力の向上に向け、校内研究をはじめ、様々な視点での職員研修を計画して実践することができた。学年児童の実態を踏まえ、教員間での情報を交流し授業改善に取り組んだ。 ・校内研究のテーマを「書く力を徹底的に高めるための創意工夫」として、昨年度に引き続き形で年間を通して質の高い研究実践に取り組むことができた。研究会では、活発な意見交流も見られるようになり、授業改善や指導力の向上の一助となっている。 ・授業改善については、部会やOJTの仕組みの中で推進することができている。個々の教職員が視野を広げ、より主体的に学ぶことができ、学び続けることができるようになるとさらによい。 ・初任者教員や若手教員を育てようという意識を高く持ち、忙しい中でもOJTを推進する様子が見られた。若手教員も自ら授業力、指導力を高めるために、時間を見つけて他の教員と情報を交換していた。 ・働き方改革を推進することで、時間外勤務を減らすことができた業務もある。 ・地域連携を推進し、ボランティアの協力を得ることで、教育の質の向上に繋がった。 ・生徒指導上の対応が放課後の時間の多くをとってしまうため、行事や教科指導などについて、十分に話し合ったり、考えたりできないことがある。 ・教職員が普段の困りごとなどを交流する機会を設けるなどして、心に余裕をもって児童と向き合えるようにしていきたい。 ・さらなる業務の精選、役割分担を行うことで働き方改革を推進する必要がある。 ◇地域ボランティアによる活動は、子どもたちの学びが充実するだけでなく、参加したボランティア自身の幸せに繋がっている。子どもたちとボランティアの双方によい影響がある。 ◇保護者や地域住民が活躍できる場が学校の内外に増えていくとよい。 ◇教職員の定時退勤日を保護者・地域にさらに周知していくとよい。 ◇土曜日・日曜日の行事や平日の遅い時間の会議は、あり方や参加の仕方を見直していく必要がある。	・校内研究で大切にしているテーマを意識した取り組みや指導ができているので、継続していく。 ・「教科横断」の視点で、様々な教科どうしや単元を繋いだ学習計画を立てる。 ・R-PDCAシートを活用し、授業改善をさらに積極的に推進していきたい。 ・近年の気象状況を踏まえ、年間計画を見直す。 ・他の教職員から教育技術を学ぶ研修、自己を振り返る研修、近隣校とのOJT研修等を計画的に取り入れていけるようにする。 ・12月末までの総時間外勤務時間は、令和5年度に比べて減少しているが、1学期やスポーツフェスティバル・校外学習が実施される10月には時間外勤務時間が多くなっている。 ・教職員の業務分担の在り方や、地域・保護者の方との連携の在り方等を工夫・改善し、教職員が児童と関わる時間や児童のために活用できる時間を増やせるようにする。
育ちと学びを支える連携	家庭・地域との連携・協働	保護者との個別相談や必要に応じて関係機関との連携を図り、子育てに対する積極的な支援に努めている。	97.4%	A	A	A	・積極的に家庭や地域と連携して教育活動を行うよう努めている。地域、家庭と連携して、同じ方向を向いて教育活動ができています。 ・子どもや保護者の悩みに寄り添い、学校ができる支援を今後も積極的に行っていく必要がある。 ・教育相談部・生徒指導部が連携している児童・保護者へは、個別の支援を充実させることができています。支援が求められそうなケースにも関わらず、支援に繋がることができていないということがないよう、全職員のアンテナをより高くしていきたい。 ・学校だよりや学年通信、保健だより、ホームページ等で、教育活動について発信することができた。 ・防災教育については、今年度、コミュニティ・スクールの熟識を通して計画の改善が図られ、大きく前進した。小中学校が連携して推進することができている。本校が大切にしている地域学習の中の大きな柱として、実施することができている。地域とともに安心・安全な学校づくりがすすめられている。 ◇防災教育は、6年間（小学校4年生から中学校3年生）の計画をもとに実施されている。小学校と中学校が連携できていてよい。活動後は地域関係者とともに振り返りを行い、取り組みの改善が図られている。 ◇地域関係者と子どもたちや保護者とのつながりがさらに増やしていきたい。	・引き続き、家庭、地域、関係機関との連携を図るとともに、情報発信に努めていく。 ・テトル配信を含め、情報発信については今後も見直しを図り、よりよい在り方を探っていく。 ・校内ウイング（クローバー教室）について周知するとともに、運営の在り方を改善していく。 ・スクールガード活動やボランティア活動をはじめ、地域との連携・協力は心強い。地域全体のウェルビーイングという視点を大切にしながら今後も推進していきたい。
		保護者・地域との交流や情報発信、参観、懇談会の実施や地域人材の活用に努めている。	94.7%	B				
		防災教育の推進、防犯や感染症対策の推進を図るため、家庭・地域と連携したり、メール配信やホームページなどを活用して情報発信をしたりするなど、安心・安全な学校づくりに努めている。	97.4%	A				
	保幼小中の連携	体験入学、部活見学など、校種間の円滑な接続に向け、子どもの校種交流や教員の出前授業などの取組に努めている。	73.7%	C	B	B	・コロナ禍で停滞してた校種間連携も、昨年度以降、推進することができている。日頃から教職員が顔の見える関係を築き、子どもたちに効果的な支援ができています。今後も推進していく。 ・今年度は近隣の幼稚園や保育園の5歳児と5年生の交流（5・5交流）を学期に1回行うことができた。 ・小中学校については、年間2回の合同研修会も実施している。系統性を意識したカリキュラムの改善に繋がっている。 ・校種間連携を推進し、教職員が一緒に研修できる機会はよいと思う。日程調整が難しいという課題がある。 ◇保幼小中連携はスムーズに行うことができています。 ◇5・5交流は小学生にとってもよい経験となっている。5・5交流などを推進することで、異年齢の子どもたちが交流できる活動がさらに充実するとよい。	・5年生と園児との交流は内容を改善しながら継続する。継続して行うことで、子どもたちのなかに、お互いを尊重した人間関係が構築できると思われる。 ・教職員の連携は、聖教研の活用も含めて、よりよいものにしていく。
		校種間の授業公開や、聖田人権教育研究会（聖教研）などの合同研修に努めている。	89.5%	B				
		保幼小連絡会、小中連絡会など、保幼小中の円滑な接続に向け、教育内容、効果的な支援などについての交流に努めている。	81.6%	B				
組織体制の充実	生徒指導体制の充実	日ごろから子どもとの関わりを意識的に高め、子どもが気軽に相談できる雰囲気づくりなど、諸課題の早期発見、日常的な予防指導に努めている。	100.0%	A	A	A	・生徒指導体制については、現在の体制が数年間定着しており、多くのケースで早期対応ができています。対応に時間を要することもあるが、ケースによっては専門家や関係機関の助言を得るなど、組織的なアセスメントを元に対応を検討することができている。組織対応は本校の強みと言える。 ・生徒指導上の諸課題の未然防止に向けた取り組みも計画的に実施することができている。 ・学校全体で早期に動いていると感じる。常にアンテナを高くし、何か感じたら相談できる教職員の環境づくりが大切だと思う。 ・子どもが落ち着いた学習環境で学習に取り組むことができるよう、生活目標を設定し、全校で一斉に取り組むことができた。 ・組織対応の体制が整う一方で、生徒指導上の課題は多く見られる。授業中の生徒指導対応を減らすことが課題である。 ◇今後も現在の体制を維持し、指導・支援を充実させてほしい。 ◇校内ウイング（クローバールーム）については、保護者も喜んでいる。利用していない子どもたちにとっても、校内ウイングの存在が安心に繋がっている。この取り組みを継続してほしい。	・教職員一人一人の認識や信念には違いがあることを認識し、OJTの視点を持ちながら平時の情報共有を行うようにする。 ・専門家や関係機関との連携を推進し、教職員や学校全体の対応力を高めることで、よりよい指導・支援が行えるようにしていく。 ・現状の校内体制を継続していくとともに、校内ウイング（クローバールーム）の充実に努めていく。
		問題行動やいじめ、不登校傾向の児童に対して、組織的な支援体制で対応できている。	97.4%	A				
		あいさつ運動、休業中の約束（夏休みのくらし等）、いじめ対応など、家庭・地域・関係機関との連携による指導に努めている。	97.4%	A				
	特別支援教育の充実	支援を要する児童の個別の指導計画を作成・活用し、支援に努めている。	92.1%	B	B	B	・個別の支援の充実や他教員、他機関との連携に努めることができた。スクールカウンセラーをはじめ、専門家と連携し、助言を踏まえた対応をすることができている。 ・諸課題の背景の中に、学習面でのつまづきが見られることも多い。個別指導計画を活用し、合理的配慮のもと、個に応じた学習支援に今後も努めていかなければならない。 ・支援を要する児童の充実については、全職員が、小学校の6年間だけでなく、中学校の3年間やその先を見据え、低学年時から計画的に取り組むことができるようにしたい。 ・特別支援教育については、全教員がもっと力量を高められるように研修を増やしていく必要がある。 ・校内ウイング（クローバー教室）の在り方を整理する必要がある。 ・個別の支援を要する児童が多く、支援を充実させることが難しい。 ◇これらの取り組みにより、まわりの子どもたちを受け入れることができる心優しい子どもたちに育っている。 ◇関係機関や専門家と連携し、今後も取り組みが充実していくとよい。	・今後も支援の充実を図りながら、保護者とともに子どもの成長を支えていく。 ・学習面のつまづきから、課題が複雑化する子どもが一定数いることを考えると、低学年から合理的配慮のもと、個に応じた学習に努めていかなければならない。今後、合理的配慮についての研修や公開授業も考えてく。 ・校内ウイング（クローバールーム）については、全教職員で運営方法について検討し、共通理解を図る。
		組織的・計画的な特別支援教育の体制づくりに努めている。	94.7%	B				
		関係機関やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等と連携した相談体制の充実に努めている。	92.1%	B				

評定（達成度）の目安

A(目標を上回る達成)：95%以上

B(目標を達成または概ね達成)：80%以上 95%未満

C(目標を達成せず)：50%以上 80%未満

D(目標を大きく達成せず)：50%未満